

折りにふれて、わが半生の諸断片を繰ることを求められ、その大半はなんらかのかたちで記してきただけれど、もっとも多感な中学生時代については、これまであまり触れたことがなかつた。私の過去の日々のなかでも、中学生時代がとりわけ費いものだったのと、想い出の小箱に閉じ込めておきたかったからなのかもしれない。

あるいは年甲斐も無い照れなのか、それとも衒いなのか、自分でも定かではないが、この夏にいただいた一通の手紙は、私の中学生時代への追憶の慾を一気に聞いてくれた。「覚か」との書き出しの達筆は、私が中学一年生のとき、初めて英語を教室で習つた田村（木倉）フミエ先生（本紙

の「ハム」執筆者で教育評論家の木倉成實氏夫からものであつた。田村先生は、私の一級下でたしか植物觀察が得意だった宮坂敏宰正在する俳句誌『岳』の同人で、私が昨年編んだ父の遺句集を最近読まれ、「なつかしさのあまりペンをとりました」と書いて来て下さいたのである。もう四十一年も昔のことなのに、教師になっていたで美しく清楚な田村先生の教室風景の数々は、THE GATE TO THE WORLD BOOK ONEという教科書の幾ページかとともに、今もはつきりと憶えてい。私の次の学年からは有名なテキスト JACK AND BETTY♪だり、私たちも一年生のときからはそれを使つたが、右の教科書はAND BOOK? YES.から始まつていて、私たちの英語は、これがスタート

戦を小学校三年生で迎え、今まで使っていた教科書に墨を塗ったいわゆる墨塗り世代の私にとって、中学校で用いた文部省著作教科書『民主主義』の新鮮な印象も忘れない。私が松本市立渾水中学校に在学したのは、昭和十四年（一九四九）年四月から二十一

## 清水中学校の頃

は、クリスチャンでもあつただけに民主主義の新しい精神を大いに鼓吹され、生徒会活動も全面的に私たちの手によだねて下さった。道路一つ隔てた清水小学校の校舎に間借りして発足した新制中学としての清水中学校は、私たちが三年生になると新校舎も落成し、秋にはその記念の第一回文化祭が生徒会主催で盛大に行われて、私も実行委員会を担つたり、第一公民館でヴァイオリンの独奏をしたりした。音楽では市内の連合音楽会が松商学園講堂で毎年行われ、三年次にはバッハの二つのヴァイオリンのための協奏曲を弾いたが、当時の清水中学校はスポーツでも断然の強さだった。私自身が主導をつとめた陸上競技は県営グラウンドで

「」のようないい清水中学  
校を私は去りがたく、  
『恋』の編集後記には、  
当時の過ぎゆく日々を  
惜しんで「全く感無量  
である」と私は書いて  
いる。こうして、私は  
清水中学校を卒立つて  
行つたが、それは講和  
条約によつて日本が独  
立した直後でもあつ  
た。(下級生(二年二組)  
の中野幹久君(現・市  
民タイムス編集局長)  
は、「皆さんは一日も  
早く独立日本の為につ  
くして下さい」(卒業  
生を送る)『清水中学  
校報』第一号(昭和  
二十七年三月二十  
日)と記して、私た  
ちを送つてくれた。こ  
の同じ『校報』に私は  
「春の雪」と題して、  
「校庭の深雪踏む日も  
名残なり」「螢の光き  
こゆる恋や陽炎だつ」  
などの俳句を五句投じ  
ていたことに、今回氣  
がついた。私の十五歳  
の青春でもあつた。  
(中嶋 順雄・東京  
外語大教授)